

7月例会「最強のふたり」

5月特別例会は無事終了しました

いよいよ蒸し暑い夏本番が始まります。

酷暑の日に、冷房のよく効いた映画館で映画を観ることは、至極の幸せを感じます。歌謡曲が時代を映し出すのと同じように、映画を観た時の記憶は、長く心に刻まれています。

お隣の明石では、今年、駅前再開発のため、老舗の映画館である明石東宝が閉館するようです。15年ほど前の加古川でも、駅前再開発ですべての映画館が無くなったことがありました。そういえば、加古川シネマクラブの発足の契機は、加古川で映画を観る機会を無くさない！という気持ちが大きかったのです。

近年でも、多くのスクリーンあるシネマコンプレックス(シネコン)の流行、映画のデジタル化などいろいろな変化がありますね。先日、『真夏の方程式』の初日公開を見に行くと、ワーナー・マイカル・シネマズが、イオンシネマという名前の会社が変わるというクーポン券を手渡され、「えっ?!(じぇじぇ)、いつのまに」と驚いたばかりです。

さて、いつも心配しているこの会の運営のことが、5月の特別例会は、スタッフをはじめ皆さまのおかげで、少し黒字になったようで、ホッとしています。

例会のお知らせ

■名称/第67回例会『最強のふたり』

■日時/7月17日(水) ①PM 2:00—、②PM 4:20—、③PM 6:40—

■場所/加古川総合文化センター大会議室(JR 東加古川駅から北へ徒歩10分、車は加古川バイパス加古川東ランプ北へすぐ)

■受付/入会手続きが終わっている方は、受付に同封の「例会参加券」をお渡しください。

入会手続きを行っていない方は、受付で4箇月分の会費(2000円)を支払い、入会手続きを終えてから、「例会参加券」をお受取りください。

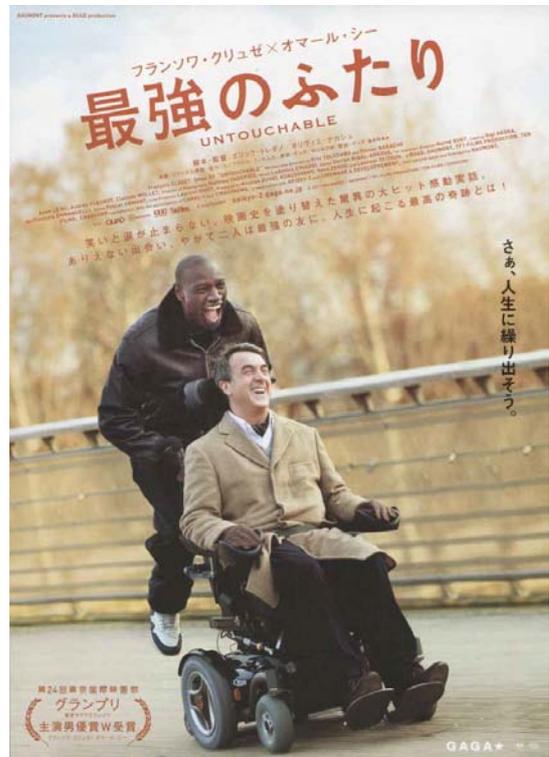
【例会作品データ】

■タイトル/最強のふたり

■監督・脚本/エリック・トレダノ、オリヴィエ・ナカシュ

■出演/フランソワ・クリュゼ、オマール・シー

■データ/2011年、フランス、1時間53分、ドラマ/ヒューマン



■解説/ひとりとは、スラム街出身で無職の黒人青年ドリス。もうひとりとは、パリの邸に住む大富豪フィリップ。何もかもが正反対のふたりが、事故で首から下が麻痺したフィリップの介護者選びの面接で出会った。他人の同情にウンザリしていたフィリップは、不採用の証明書でもらえる失業手当が目当てというフザケたドリスを採用する。その日から相入れないふたつの世界の衝突が始まった。クラシックとソウル、高級スーツとスウェット、文学的な会話と下ネタ——だが、ふたりとも偽善を憎み本音で生きる姿勢は同じだった。互いを受け入れ始めたふたりの毎日は、ワクワクする冒険に変わり、ユーモアに富んだ最強の友情が生まれていく。だが、ふたりが踏み出した新たな人生には、数々の予想もしないハプニングが待っていた——。

(ホームページ解説から)

おそらく、感動的で、ストレートにわかりやすい作品です。

少し皮肉っぽくて、芸術性を意識したわかりにくさを感じるという、私にとってのフランス映画のイメージとは全く違う、まるでアメリカ映画のようなフランス映画です。

(宮)

高野悦子さんのお別れの会に参加して

高野悦子さんが、今年の2月9日に永眠されました。83歳でした。高野さんは、映画プロデューサー、放送作家、テレビドラマ演出家でもあります。何といっても世界の埋もれた名作映画の発掘上映を行っているミニシアターの元祖「岩波ホール」の創設以来の総支配人として、日本の映画文化発展の先頭に立ってきた人物です。

6月3日に東京の帝国ホテルで「高野悦子 お別れの会」が開かれ、そこに参加してきました。

元文部大臣の赤松良子さんに続いての山田洋次監督の弔辞では、冒頭「高野さんと始めて出会ったのは(映画評論家の)山田和夫さんに連れられて行った御殿場での映画大学でした」で始まり、監督自身の体験をふまえて、高野さんの人柄と業績に最大の賛辞を送られていました。「高野さんがシネマ君と結婚してくれたお陰で、(私たちの見ることのできる)映画がどれだけ豊かになったか」とか「女房繋がりで始まったドキュメンタリー『平塚らいてふ』にいつしか一生懸命にお手伝いをしていたこと」とか、「満鉄の社員だった父が素晴らしい先輩の技術者がいると言っていたが、それが高野さんの父のことだった」という共通の満州(中国)への思いについても語られました。

続いての弔辞は映画評論家の佐藤忠男さんで、商売にならないとされていた巨匠の作品からドキュメンタリーまで幅広く興行を成功させていった業績をコンパクトに紹介していました。

3人の弔辞の後は晩年の高野さんが師事した韓国舞踊の金梅子さんによる「死者を送る舞」があり、現在の岩波ホール支配人で高野さんの姪にあたる岩波律子さんの喪主挨拶で閉式。その後、参加者個々による献花のあと別室でバイキングをいただき高野さんを偲びながら、参加者同士の交流会というか同窓会が結構長く続いていきました。別室には、高野さんの写真、勲章、賞状、岩波ホール上映作品などがコンパクトに並べられ、高野さんが出演しているDVDが上映されたりしていました。スタッフの心づくしという感じでした。

参加者は700人を越えていたらしく、映画界だけではなく、政財官界からも沢山参加しているように感じました。クリスティン・ハキムさんがわざわざインドネシアから来ていたのには驚きでした(ハキムさんは看病にも駆けつけていたそうです)。アンジェイ・ワイダ夫妻、ジャンヌ・モローさんからは弔電が来ていました。

小栗康平監督、香川京子さん、羽田澄子監督などの顔も見えました。

高野さんの存在が大きかったのは間違いありませんが、岩波ホールのスタッフたちも頑張っていますし、私たちが力の限りその志を引き継いでいかななくては、出来ない、出来ることなら発展させていかななくては、という思いを新たにしました。(健)



高野悦子お別れの会 会場風景

前回(特別)例会の報告

5月21日の例会では、特別例会として、一般の有料入場者とともに、『人生、いろどり』(西口典子監督)を鑑賞しました。過疎の町である徳島県上勝町のおばちゃんたちや農協職員のまちおこしの奮闘を描いた元気の出る作品でした。

鑑賞後のアンケートでは、「明るく元気の出る良い作品だった」という好印象のものがほとんどで、全体に好評でした。その他、少しだけですが「まあまあ」として、作品の作り方の粗さの指摘や、明朗な作品だけでなく印象に残るような作品を期待する声もありました。

また、とても暑い日にもかかわらず、会場で冷房装置の運転を行っていない時期であったため、たいへん暑い目に遭われた方も多かったと思います。環境が悪かったことをお詫びいたします。

午前から夜間まで4回の上映で、参加会員133人と一般344人の計477人の鑑賞者があり、ほぼ計画どおりでした。

ご意見をお待ちしています

映画の感想や意見など、このニュースへ記事をお寄せください。200~300字程度にまとめていただければ助かります。おすすめ作品をファックス、メールや例会会場のアンケート用紙でお知らせください。

加古川シネマクラブ 〒675-0101

加古川市平岡町新在家 752-46 B-313 山本方

TEL 090-9283-0435 FAX 078-935-8528

E-MAIL cinemaclub@nifty.com

<http://homepage3.nifty.com/cinemaclub>

会員数 168 人 (5月21日現在)